

この人に聞く

イーピービズ 代表取締役 南 丈裕 さん

農業やマッサージなど個人の能力活かす障がい者雇用

—— 6次産業化が、人財と家族の誇りとなる

イーピービズ代表取締役 南丈裕さん

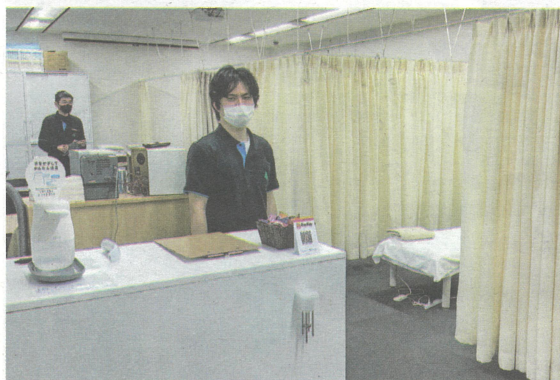


——イーピービズはどのような企業なのでしょうか。

南さん 当社はEPSグループ傘下の企業です。EPSグループは1991年に創業した企業で医薬品の開発受託をメイン事業としています。その中でイーピービズは医薬品開発における専門的な医療機器のレンタル・販売を主たる事業としています。例えば、一般的に心電計は皮膚科に導入されていません。しかし治療では、皮膚科であっても医薬品の服用後に心電図が必要となるケースもありますので、治療期間中お貸しするといった事業です。現在は、この医療機器レンタル・販売と医薬品開発専門人財事業・(障がい者雇用特例子会社・エルダー人財事業)を中心に事業を展開しています。

——障がい者雇用について、詳しくお聞かせください。

南さん 当社は就労支援や行政系の支援を受けている企業ではなく、全く補助金を受けていない障がい者雇用特例子会社という位置付けです。



農業やマッサージなど人財の得意分野を活かした雇用

2018年4月に「障害者雇用促進法」が改正されて以来、注目度が高まり続けている障がい者雇用。「月刊H&Bリテイル」の読者であるドラッグストアや調剤薬局の関係者も、ヘルスケアを担うビジネスパーソンとして積極的に関わっていく必要がある。今回取り上げたいのは株式会社イーピービズによる障がい者雇用の考え方と取り組みだ。同社・代表取締役の南 丈裕さんにインタビューし、理念や実例を聞いた。ぜひイーピービズの取り組みを参考にし、同社とのコラボレーションを含めて障がい者雇用について再検討したいところだ。(記事=佐藤健太)

EPSグループが拡大し、国内でも20社程度企業があり、傘下企業それぞれが障がい者雇用を実施するのが困難なケースもあります。そこで当社は、EPSグループ全体の障がい者雇用を代行して全て引き受けています。現在では、100名ほど雇用させていただいています。

——どのような障がい者雇用について、貴社はどのような思いを持っていますか。

南さん 当社の特例子会社の名称は「HATARAKU LAB. (読み: はたらくらぼ)」と言います。パーパス(理念)は「ともに考え、ともに働き、ともに笑う」。一人ひとりの生き方にあわせた「働く」を創りだす。多種多様な人たちが集い社会参加できる共生の場を創りだす。今までとは違った働き方(働く場)を創りだす。こうしたことを目指しています。私たちみんなで考え、みんなで働いて、みんなで笑おう、そうすることで、今までにはない働き方を創出しているという姿勢です。

障がい者雇用に着手したばかりの頃は、皆さんが「障がい者雇用」と聞いて想像する「事務の補助」「社内便の配達」「シュレッダーかけ」などからスタートしましたが、それだけでは皆さんが働く「場」が足りないですし、それぞれの個性や得意分野を活かした雇用にはつながりません。

当社の障がい者雇用の一例を挙げると、EPSグループ社内に設置している社員向けのマッサージルームに、視力に障がいがある方を雇用し、マッサージ師と

して活躍してもらっています。彼らからは「マッサージを受けて疲れが取れたとリピーターになってくださる方が増えていて、とてもやりがいを感じています」という声が出ていますし、働いている姿を見ると、とても生き生きとしています。

——貴社が雇用している障がい者の皆さんが農業にも携わっていると聞きました。

南さん 2018年に埼玉県熊谷市で農業をスタートしました。最初はオリーブ畑から始まり、現在では野菜の栽培、稲作などに仕事広がっています。

オリーブはとても成長が速く、枝の剪定作業や剪定された枝の処理が大切な作業と言われています。じっとすることが難しく、すぐに走り出してしまう障がい者の方もいますが、オリーブ畑は、どれだけ走っても終わりが見えないくらい広く、こうした環境ですと、心が落ち着いて逆に走らなくなり、枝をじっと観察し「どこを切ったらいいか？」と考えながら作業しています。

オリーブ畑には、歩行に杖を必要とする障がい者の方も働いています。剪定された枝をそのままにしておく、とても危険ですし、作業効率も下がってしまいます。この剪定された枝を入れるとチップとなって出てくる機械があるのですが、これがゆっくりと動くため、杖をその機械の上に置き、そこにつかまってゆっくり歩きながら、枝を機械に入れてくれます。

また、ネギの種の管理なども行なっています。ネギの種は60日ほどで苗になるのですが、水やりや温度管理に大変な手間がかかり、その間、農家さんたちは休む時間を取ることが難しい状況におかれます。そこに当社の人財が関わっていくことで、農家さんたちがこの仕事から解放されて、休日をつくることができ、その休日仕事から離れて有意義に過ごすことができることにつながっています。「傍(農家さん)が楽になる」私たちのパーパスに沿った取り組みになっています。

——貴社は、障がい者雇用から6次産業化にも発展させています。



日本酒「惠普壽(えぶす)」

南さん 世の中には「障がい者雇用をビジネス化してはいけない」という風潮がありますが、私は間違いだと思っています。ある日、障がい者の方々が作業している場を視察した際に、ある方が「社長、私たちがいるのは負担ですか？」と聞かれたことがあります。もちろん、そんなことはありません。立派に働いて、社会に貢献しているのですから。一方で、障がい者の保護者の方々も、お子さまが自分で稼げるようになることで、未来への不安感が軽減されるということもあります。

そこで当社が取り組んだのは、障がい者雇用から発展する6次産業です。一例を挙げると、当社の人財が田植えした田んぼで育った米を原料にした日本酒「惠普壽(えぶす)」の発売です。「あまねく人に恵みを与えて長生きしよう」という願いを込めてネーミングしました。「惠普壽」の発売によって、当社が雇用している障がい者の誇りにもなりますし、保護者さんも「この会社に勤めて、我が子がこの商品を作ったんだ」とポジティブな思いになります。

このほか、畑で採れたオリーブや、日本酒を作る際の酒粕などを活用した焼き菓子、ハーブティー、ジャムなどもあり、現在はECサイト(<https://hatarakulab.theshop.jp>)で販売し、好評を得ています。

最後に、2022年2月17日に東京・飯田橋にある筑土八幡神社の傍らに筑土テラス Café & Barを開業しました。障がい者雇用特例子会社(HATARAKU LAB.)で6次産業化を推進していますが、その製品や野菜を活用した飲食店を開くことで、各地で活躍している障がい者のスタッフの取り組みへの理解を深める「場」となることを目指しています。

是非読者の皆さんも飯田橋、神楽坂にお越しの際は筑土テラス Café & Barにお立ち寄りください。

——ありがとうございました。